



九十九の強い提言で実現した治療法は、無茶を通り越し破壊的行為と言えた。

それが通ったのは、病院のスポンサー的存在の清水恒彦による強力なバックアップがあったからに他ならないが、九十九の恩師にあたる某医大教授による学会の押さえ込みが成功した事も大きい。

骨髄移植のドナーは彼の兄が適合者として上げられた。検査の結果、適合率は90%を超えていた。彼は肝臓の移植も辞さなかったが、負担の大きさを考慮し候補外とされた。

そして。

治療とも呼べない無謀な挑戦が始まり、ひと月と半分が過ぎた。

◇

「帰るわよ」

清水紗季子は傍らの娘に声を掛けた。

厳重に隔離された個室。無菌テントの中の殉は昏々と眠っている。

「うん…」

加夏子はじっと殉の横顔を眺めていた。

「今日は顔色がよさそうじゃないか。肝臓のドナーも見つかったことだし、このままうまくすればひよっとするぞ、加夏子」

清水恒彦はことさらに明るい声で言ってみせた。

「見つかったの!？」

「ああ、カナを驚かせようと思ってな。昨日の夜、九十九先生から連絡があったよ」

「それじゃあ…ほんとうに…ホントのほんとに、ジュンは助かるかも知れないのね!」

「そうさ。彼は加夏子の恩人だ。どんな無理をしても助けたいと思ってる」

「そうよ、カナちゃん。わたしだってパパとおんなじ。この子を助けてあげたいと思ってる」

「パパ… ママ… ありがと。二人の、みんなのしてくれた事、本当に感謝してる」

泣きだしそうになる加夏子の背中を、恒彦が優しくさすった。

「さ、今日は家に戻ろう」

三人は加夏子を中心に、一階ロビーへのエレベーターへと向かった。

「あなた。カナちゃんと先に戻ってて」

「どうした? サキ」

「リハビリ経過の確認書、出すの忘れてたの。私、九十九先生の所までいってきます。あちらで記入してきますから、あとからタクシーで戻ります」

「わかった。遅くなるなよ」

恒彦達の姿がエレベーターの向こうに消えると、紗季子の顔から笑顔が消えた。
きびすを返し、医務室のある棟とは逆へと進み始める。

小児病棟の向かい側。

リハビリセンターの方へと。

◇

どうなんだろうか

一日のメニューが全て終わったりハビリセンター。

今夜はデートだという若いトレーナーから引き継ぎを受けた銀さんは、器具を所定の場所に戻しながらぼんやりと殉のことを考えていた。

確かに悪くなってはいないようだ
だが良くなってるようにも見えねえ

骨髄移植はうまくいってるようだが、問題は他にも山ほどある
弱りきった内臓、衰えた体力
この先の手術に坊やの身体は耐えられるだろうか

やらなきゃ死ぬのは確実だ
九十九の奴には、素人にゃ判らない勝算があるんだろう

だがなあ
なんかいい予感がしねえんだよな

それにしても、九十九の奴め
精神科バカ一代だとばかり思ってたが外科もやりやがるとは
底の知れない奴だ

片づけを終え、照明を落として振り返った銀さんはギクリとして動きを止めた。
出入り口の灯りを背に、小柄な影がひっそりと立っていたのだ。

「だれだ」

こわばった声に応えるように、影はすうと歩み出た。
窓から差す薄明かりが影に色をつける。

「アタシよ、久我さん」
「…サキ…？」

淡い藍色のワンピースを身に着け髪を降ろした紗季子は、別人のように銀さんの目に映った。

いや
別人じゃない
あの頃の…
サキだ

「なにかようか」
「アナタに話があるの」
「改まってなんでい。旦那とお嬢と三人でくりゃいいじゃねえか」

「二人きりで話したかったの…ギン…」

銀さんはもう一度ギクリとした。

思い出す事も無くなっていた遠い昔、自分をその名で呼ぶ女がいた。

街本紗季子。

今は、清水紗季子。

「…思い出しだぜ。まだ持ってたんだ、その服」

「アタシ体型変わらないんだ、あの頃からずっと」

「懐かしい呼び方だな。ちょっとニヤけちまったぜ」

「顔、青いわよ」

「…」

更に数歩、足を進めた紗季子はすれ違うように銀さんと肩を並べた。

暗いリハビリルームの奥へ向け話し出す。

「カナちゃん…あの子、隠してる」

「隠してるって、何をだ」

「買い置きの手拭きが減ってない」

「?どういう意味だ」

「生理、来てないみたいなの」

一瞬、判らなかった言葉の意味が、じわじわと銀さんの脳裏に広がっていった。

「おい、それって…」

「ええ。たぶん」

足元の床がぐにやりとするのを感じ、銀さんは小さくよろめいた。

「なんてこった…沼津に行ったあの時か…しまった…」

「しまった？」

「情けが仇になっちゃった。こうなる事は判りきってた筈なのに…俺は見て見ぬふりを…」

「何か勘違いしてない、ギン」

「かんちがいだって?! どうすんだよ! 二人ともまだ子供だぞ! 一人は死にかけてんだぞ! どうしようってんだよ!!!」

「わからない」

「ほらみろっ! オマエだってそんなじゃないか!」

狼狽し切った銀さんが紗季子に詰め寄った。

「わからないのは、あのヒト…恒彦さんよ」

下からひたと見据える紗季子の目。

掴みかからんばかりだった銀さんの勢いが止まった。

「確かに、あのヒトは彼に恩義を感じてる。だから治療費も負担している。義理堅いのね。昔のアンタと一緒に。でもね」

向きを変え、紗季子が窓へと近付いた。

背を向けたまま話し出す。

「あのヒトはカナちゃんを溺愛してる。事実をありのまま受け止められるかどうか、アタシには判らない」

「…そんな話されたってよ、俺にだって判んねえよ…」

「男ってみんなそうよね。だらしない」

窓を開けると、紗季子はバッグから煙草を取り出し火をつけた。

「たぶん墮ろさせるわ、あのヒト」

「…」

「何も言わないのね」

「なに言えてんだ。それで清水さんの気が済むならそうすりゃいい。お嬢だってまだ若いんだ、よりによって今、子供なんて…」

「やっぱり勘違いしてる、ギン」

外に煙草を捨て振り返った紗季子の目には、火のようにゆらめく光が灯っていた。

ツカツカと歩み寄ってくる。

「アタシは、カナちゃんの好きなようにさせてあげるつもり。産みたいなら産ませてあげる」

「オマエ…」

「あのヒトが反対してもね。あの子にはあんな思いはさせたくないの」
「あんな思い…って、そりゃどういう…」

紗季子は最後まで言わせなかった。
右目の辺りに火花が散って、銀さんはうめきながら片目を押さえた。

「なにしゃあがる！」

小さな拳を突きだしたままの紗季子に怒鳴った。

「アタシ墮ろした。7年前、勝手に死ににいった男の子供をね！！」